

大聖堂のある街で

堀田耕介



第1話

ラプラス通り

ラプラス通り

ぼくたちの街は、川を挟んで西に旧市街、東に新市街。旧市街にはとがった屋根を持つ大聖堂が、新市街には大きなファサードの市庁舎がその中心にそびえている。新市街には市庁舎前のコーシー広場から放射状に伸びているいくつもの大通りがあつて、それに沿ってオフィスが立ち並ぶ。その大通りのうち海に向かってまっすぐに伸びているラプラス通りがこの街のメインストリートだ。

旧市街の大聖堂の隣に聖堂付属の小学校があつて、ぼくはそこに通っている。聖堂の前の小さな広場にはアイスクリーム売りやバンドネオン奏者が出ていて、ぼくたちは学校帰りにいつもそんな店を冷やかしている。ぼくの家は狭い石畳の道に沿って作られた5階建ての建物の5階にあつて、まわりの建物と同じく石造りだ。窓を開けるとツバメが巣を作っている。階段で5階まで上がらなければいけないのは大変だけど、ぼくはこの家が好きだ。空に近くて、窓から正面に大聖堂のトンがり屋根が見

えるからだ。

大聖堂の鐘の音が街中にこだまする午後4時、人々は仕事を終えて家路につく。新市街の繁華街に人が増えだすのもこの時間だ。ラプラス通りのブティックやカフェ、本屋さんや時計店が並ぶ一角も、この時間になるとそぞろ歩く人が増える。ラプラス通りはお洒落な人がたくさん歩いていて、お店はどこをのぞいても素敵で、ぼくが一番好きな通りだ。

ぼくはこの時間を目指して旧市街から走っていく。コーシー広場でアイスクリームを売っている同級生のキリヤに手を振って、ぼくはラプラス通りに曲がった。

ぼくはお父さんの妹のえっちゃんに編んでもらった赤いセーターを着て、ベージュのハンチングをかぶり、紺色のズボンをはいている。石畳を走る靴は、黒いズック靴。行き交う人たちの弾んだ会話、白い息。二月の夕方はもう暗い。でもとても寒いと言うほどじゃない。街の前に広がる海には暖流が流

れ込んでいて、冬でもあまり寒くないからだ。

ぼくの行き先は本屋さんだ。今日新しい雑誌が届いたと電話があったから、受け取りに行く。今月号には短波ラジオの作り方が載っている。帰りに部品も買いに行こう。ぼくは息せき切って本屋さんの扉を開け、チリンチリンとドアのベルが鳴るのもかまわず店の中に飛び込んだ。

「きや」

中から出てきた赤いコートにぶつかって、ぼくは尻もちをついた。ぼくは、

「ごめんなさい。」

と言って顔を上げた。目の前に、透き通るような瞳をしたきれいな女の人があった。赤い口紅を引いて、薄緑のベレー帽をかぶっている。赤いフェルトのコートを来て首にスカーフを巻き、チエツクのスカーフにブーツ。ぼくは思わず見とれてしまった。

「ごめんね。」

その人の声。どこか違う世界で響いているような気がした。ぼくはどぎどぎした。今までこんな素敵な人に会ったことがない。ぼくは真っ赤になって

顔をそらして、

「いいえ、こちらこそ。」

と小さい声で言った。

隣にいた白いコートの女の人が声を立てて笑った。

「礼儀正しい子じゃない。」

見上げると、その人もすすきりとした顔立ちのきれいな人だった。

「大丈夫？」

赤いコートの人が膝を折ってぼくに尋ねた。

「うん、大丈夫。」

ぼくは立ち上がった。ふっと女の人の匂いがした。ああ、この人、お化粧しているけど、本当はすごく若いんだ、と思った。

「ごめんね、坊や。でもお店に入るときは中の人を確かめたほうがいいわよ。」

白いコートの人が笑う。赤いコートの人も微笑んで立ち上がった。

「じゃあね。」

二人は店のおじさんに向って、

「「きげんよう。」

と言うと、肩を並べて舗道を遠ざかって行った。ぼくは二人の後ろ姿に見とれた。

「うおっほん。」

店のおじさんが咳払いした。

「ユキちゃん、ラジオデイズ、届いてるぞ。」

おじさんに言われてぼくは我に返り、

「ありがとう！」

と言ってお店に飛び込んだ。

ぼくは本を受け取ってお金を払うと、ラプラス通りに飛び出した。さっきの人たちはどこへ行ったんだろう。きよろきよろ見回したけど、見つからない。あの人たちが行った方向へ走って行ってみる。パシバル通りを渡ろうとしたら、路面電車が来た。その通過を待っている間に信号が赤に変わる。黒いがつちりしたリムジンや銀色のスポーツカーがぼくの前を横切る。信号が変わって、ぼくは駆け出した。角を曲がろうとしたとき、後の方から声を掛けられた。

「ユキちゃん！」

振り返ると、学校帰りの制服を着たえっちゃんが立っていた。

「どうしたのユキちゃん、そんなに急いで。」

えっちゃんはにこにこしている。ぼくは急に恥ずかしくなった。

「なんでもないよ。知っている人かなと思って追いかけたんだけど、見失っちゃった。」

「本当？誰かきれいな女の子でも見かけたんじゃないの？」

「そんなんじゃないよ。」

顔が赤くなつていくのが分かる。えっちゃんは笑い出した。

「もう、ユキちゃんたら、正直なんだから。どういう人なの？」

「そんなんじゃないやい！」

ぼくはハンチングで顔を隠した。えっちゃんは市庁舎の向こう側の瀟洒な白い家の並んだ住宅街に住んでいる。えっちゃんといっちゃんのお母さん、つまりぼくのおばあちゃんはおじいちゃんが亡くなつ

たあと、家を建てて引っ越したのだ。お父さんの兄弟は7人いるけど、えっちゃんが一番下。おばあちゃんも45歳のときの子どもなのだ。

「ごめんごめん、あんまり真剣だったからさ。」

「えっちゃんこそどうしたのさ。」

「あら、私は学校帰りよ。この先が私の学校だもの。」

「あれ、セブってそっちだっけ？」

「そうよ。」

えっちゃんが通っているのはサンセバスチャン女子

学院。でも街の人はみんなセブって呼んでいる。女の子たちの憧れの女子校だ。

「ねえ、今からおうち帰るんでしょ。」

「うん。」

ぼくは膨れた顔をして言った。えっちゃんが出てこなかったら、もつとさっきの人たちを探せたのに。

「何怒ってるのよ。」

えっちゃんにはやにやした顔をしてぼくのほっぺたをつついた。

「あきらめなさい。かわいい子なんて一杯いるわよ。」

特にセブには。」

「自分のこと言ってるんでしょ。」

「あらくよく分かったじゃない。」

えっちゃんは笑った。ぼくはおかしくない。

「まあいいからいいから。きつとまた会えるわよ。」

「そんなこと分かるもんか。」

えっちゃんはぼくの顔を覗き込んで言った。

「きつと会えるわよ。私の勘はずれない。ユキちゃんだって知ってるでしょ？」

「……そうだけど。」

「だから今日はもうあきらめて。ね、私一緒にユキちゃんちまで行くから。」

「一人で帰れるよ。」

「二人で行った方が楽しいじゃない。」

「勝手にしなよ。」

ぼくはぷいと向いて旧市街の方に歩き始めた。えっちゃんは走ってきてぼくの手を握った。

「帰りましょ。」

「子どもじゃないもん。」

「あら、デートみたいでいいじゃない。私たち、6歳し

か違わないんだから。」

「6歳も、だよ。」

「やだ、いじわる。」

えっちゃんはおくと手をつないで歩くのが好きだ。ぼくは恥ずかしいんだけど。でもえっちゃんはちよつと赤い髪の毛をして、ちよつとそばかすがあるけど、すごく明るくて、みんなに好かれるタイプの女の子なんだ。ぼくだってえっちゃんの前ではちよつと大人ぶっちゃうけど、本当はえっちゃんのこと好きだ。

いつでも上を向いて、スキップしながら歩いているような感じの子だ。セブのライトブルーの冬の制服にネイビーのコートがよく似合う。同じ色の帽子をちよこんと乗せると、本当に可愛いんだ。手をつないで歩くと、みんなが振り返る。ぼくは嬉しいんだけど、この人はぼくのおばさんなんです、なんて言えないから、なんか恥ずかしい。

新市街は道路が広く、歩道には街路樹もある。今は冬だからプラタナスも葉を落としているけれども、こずえからのぞく空は青くて、冬の日差しは暖

かい。えっちゃんの手は最初冷たかったけど、手をつないで歩いているうちに汗ばんでくるくらいにあたたかくなってきた。

「ユキちゃんの手は温かいね。」

「心があったかいから。」

「あら、手が冷たい人は心が温かいって言うわよ。」

「あれウソなんだって。」

「だれが言ってたの？」

「校長先生。」

「ウソばかり！校長先生がそんなこと言うはずな

いでしょ！」

えっちゃんは鈴を転がしたように笑う。ぼくたちは手をつないで新市街と旧市街をつなぐエマニエル橋を渡り、古めかしい石造りの旧市街に帰ってきた。

旧市街の家はみな石造りで、4階建てか5階建てだ。

「えっちゃん。」

3階の窓から手を振る女の子がいる。

「こんばんは。また来ちゃった！」

「ねえ、うちに寄ってきなよ。」

「ユキちゃんちに行くから。」

「そうなんだ。じゃあまた今度ね。」

「またねー。」

えっちゃんには友達が多い。3年前までうちの向かいの建物に住んでいたから、みんな顔なじみだ。街はすっかり暗くなってきて、ガス灯に火を入れるおじさんが点火装置を持って歩いている。

「もう5時ね。」

大聖堂の鐘が鳴り始めた。ぼくのうちは、大聖

堂の広場が続く坂道の途中にある。ぼくのうちは5階だけど、エレベーターがない。ぼくは階段を駆け上がる。えっちゃんはスカートだから走れない。

「待ってよ、ずるいよユキちゃん。」

えっちゃんはスカートを持ち上げて走ってくる。

「おてんば！」

「おてんばじゃないわよ！」

ぼくは5階の扉を開けて中に駆け込む。後ろからえっちゃんが飛び込んできてぼくに飛びついた。

「もう、ずるいんだから。」

二人ともはあはあ言つて、二人で笑い出してしまつた。

大聖堂の鐘が鳴り始めた。午後の祈りの時間だ。ぼくといつちちゃんはぼくの部屋に行つて窓から大聖堂を見る。手を組んで目をつぶつてひざまずいて祈る。大聖堂の向こうに、何か雲の隙間から見える夕陽のような暗いオレンジ色の光が見えた。あれはなんだろう。ぼくは隣のえつちちゃんを見た。えつちちゃんも、目を見開いたまま、それを凝視していた。

ぼくは驚いてえっちゃんに声をかけた。

「どうしたの？」

えっちゃんは我に帰った。

「あ、ごめんなさい、なんでもない。」

ぼくは大聖堂の方を見た。もうそこにはなににもなく、ただ夕闇があるだけだった。

「雲の向こうに、夕陽が見えたのに。」

「あれは夕陽じゃない。」

えっちゃんの言葉の意外な強さに、ぼくは驚いた。

「夕陽じゃなければ、何なの？」

えっちゃんは目を押さえた。唇が震えた。

「どうしたの？」

えっちゃんはしばらくそうしていたけど、やがて深呼吸して言った。

「大丈夫、何でもない。心配させてごめんね。」

えっちゃんはいつもより明るい声を出して言った。

「さて、ごはん作ってあげる。もうすぐお父さん帰って来るでしょ。」

「ぼくも手伝うよ。」

「ユキちゃんはいいわよ。ラジオデイズ、買ったばかりなんでしょ。」

「でも。」

「大丈夫よ。ごめんね、心配かけて。さ、支度しなくちゃ。」

えっちゃんは何部屋を出て行った。ぼくはちよつと心配だったけど、そう言われたから買ってきたばかりのラジオデイズを袋から出した。するとどこから紛れ込んだのか、あの赤い服を着た女の人の匂いが漂ってきた。

ぼくは思わず深呼吸した。胸に一杯に、あの人の記憶が蘇ってきた。

「大丈夫？」

「うん、大丈夫。」

あの人の唇の赤さが、何度もよみがえる。ぼくは眼をつぶって、あの人の顔を思い浮かべた。

ぼくははっとして、そっと台所をのぞいた。えっちやんは鼻歌を歌いながらフライパンで何かを炒めている。

「よかった。」

ちよつとほつとする。何か納得できない気持ちは残ってるけど、ぼくは自分の部屋に戻って、あの人のことを考えながらラジオデイズのページをめくった。

7時になって、お父さんが帰ってきた。

「ただいま。」

お父さんは女物の靴があるのを見て、

「えつこが来ているのか？」

と聞いた。

「お兄ちゃん、お帰りなさい。」

えっちゃんは走ってきてお父さんに飛びついた。

「くらくら。」

お父さんは少し笑ってえっちゃんの頭を撫でる。

えっちゃんは「えへ」という顔をしてお父さんから離れて、

「今日、ラプラス通りのフランクリン時計店にいた
でしよう。」

と聞いた。

「ああ、今度市庁舎の時計の仕事を頼まれてな。」

その打ち合わせに行ってたんだ。」

「市庁舎の？すごいや！」

「すごい！あの大時計を、お兄ちゃんが作るの？」

「もう200年もたってるからな、今の時計は。街中の時計職人が協力して、次の200年止まらないで動く時計を作ることになったんだ。」

「うわあ、すごいね。みんなに自慢しちゃおう！」

「お父さん、忙しくなるね。」

「ああ、でも今とそんなに変わらないさ。必ず7時には帰るようにする。ユキが一人じゃかわいそうだ

からな。」

「私もいてあげるよ。」

「えつこはちゃんとお母さんのところにいる。まだまだ元気だけど、一人きりなんだから。」

「だってお母さんいろいろうるさいんだもん。」

「親というのはそういうものさ。俺たち兄弟も、みんなえつこがいるから安心してているんだから。」

「みんなで私にお母さん押し付けてさ。」

えっちゃんほっぺたを膨らませた。

「まあまあ」飯にしよう。シチューのいい匂いがする

じゃないか。」

「そうよ。いつも男の手料理ばかりじゃ飽きちやうでしょ。今日は私が腕をふるいましたからね。」

「いただきまーす！」

「こらユキちゃん、ちゃんと手を洗いなさい！」

夕食後、三人で紅茶を飲みながらおしゃべりして、ぼくは眠くなったので自分の部屋に戻った。えっちゃんはおばあちゃんに電話をかけて、今日はユキちゃんちに泊る、と言った。おばあちゃんはぶつぶ

つ言つてたみたいだけど、朝ごはんまでに帰るから、
と言つて押し切つたらしい。ぼくは寢床の中でラジ
オデイズを読みながら、どこからか漂つてくるあの
赤いコートの女の人の匂いにはいい気持ちになつて、い
つの間にか眠つていた。

夜中に目が覚めると、明かりがつけっぱなしだつ
た。少し寒くて、トイレに立った。居間からはまだ
明かりがもれていて、お父さんとえっちゃんの小さ
な話し声が聞こえてきた。まだ起きてるんだ、そろ

そろ寝た方がいいのに。トイレをすまして部屋に戻り、ぼくはすぐ寝入ってしまった。

大聖堂のある街で 第1話 ラプラス通り

<http://p.booklog.jp/book/44106>

著者：堀田耕介

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kous37/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44106>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44106>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.